

縁は異なるもの味なもの

～二代目桂小南からローカル岡の40年～

佐々木晃彦

(文化世相作家)

中野・鷺宮の小南宅に居候

その頃は毎日、寄席小屋に通っていました。一端の社会人として第一歩を踏み出そうとしている1970年頃で、まだ20代半ばでした。当時の寄席は江戸時代には及びませんが(注1)、活況を呈しておりました。

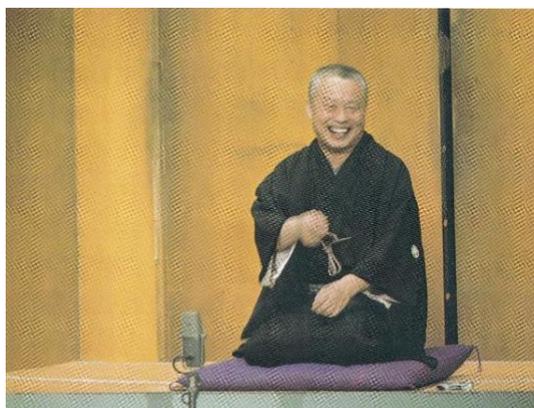
柳亭痴楽、林家三平、三遊亭歌奴など蒼々たる噺家が次々と高座に上がっていました。噺家はテレビ、ラジオに引っ張りだこ。スイッチを入れれば、どこかの局に出ておりました。色ものも盛んで、漫才(注2)ではコロムビアトップ・ライト、獅子てんや・瀬戸わんや、Wけんじ。ボーイズでは灘康次とモダンカンカン、人見明とスイングボーイズ、ぴんぼけトリオ。漫談、物まね、声帯模写では桜井長一郎、江戸家猫八、牧伸二など多彩な顔ぶれでした(注3)。上方芸人(注4)も上京してテレビ、ラジオに出演しておりました。1週間で50本を超える演芸番組があり、お笑いは否応なしに私たちの生活に浸透していました。

私はフランスから帰国したばかり。1ヶ月ほど山形の田舎で休み、上京しました。しかし身の処し方に迷いがありました(注5)。重苦しい気分が潰されそうになっており、逃げ込んだ最も居心地の良い隠れ家が寄席小屋でした。予約不要、前売りチケットなし、いつ行っても演芸を楽しめる。ブラリと入り、気の赴くまま好きなだけ居ることができる。寄席通いを続けていた背景です。

悶々とした時を過ごしているなか、桂小南(注6)の落語がスーと心に落ちました。寄席小屋の近くには喫茶店があります。高座に上がる前にコーヒーを啜る芸人さん、取材を受けている大師匠、一人寂しく身動き一つしない有名な芸人さんもおりました。そして、いつしか、高座後の師匠を楽屋出口で待ち、喫茶店で一時を過ごす間に

なっていました。しばらくすると小南から、「家に空き部屋があったなあ。お前来るか？」と声が掛かりました。遠慮をしている理由などありません。中野区鷺宮にある師匠宅の、真ん前のマンションに転がり込み居候です。そこは広い稽古場で、衣装類や凄い量の資料、書籍、カセットテープが積み上げられていました。落語界の大御所になっておられた小南ですが、その勉強ぶりに私は、心底圧倒されました。

喜代子夫人のつくる美味しい朝食をご自宅宅で戴き、くつろいでいるとお弟子さんが一人来宅し、用件を済ませて帰ると、また一人・・・と示し合わせたようにやって来ます。文朝、南喬、南笑・・・小南はお弟子さんが多い(注7)ことでも知られておりました。皆さんに共通するのは、お行儀の良さ。挨拶もシッカリしており、言葉遣いがとても丁寧です。お弟子さんが帰った後、恐る恐る師匠に伺うと「噺家は誰でも日常的に使っている言葉で仕事をしているんだ。誰でもしているハナシでお代を頂戴している。だから、行儀作法、言葉遣いは何よりも大切なんだ」と諭すように言い渡されました。ほとんどの落語をレコードにしていた師匠は、「どうだ、何なら口利きしてあげるからレコード会社にでも入るか」。小南はそんな業界にも顔利きでした。レコードと磁気テープが“2大メディア”と言われていた、55～6年前のことです。しかし、日本市場に100%身を埋めることを善としない私は、丁寧にお断りをしました。そして、縁あってサハラ砂漠に赴任しました。師匠は手紙に、たくさんの録音済テープを添え、何度も現地に送っては励まして下さいました。手紙は「いつでも戻って来て良いんだよ」と語り掛けているようでした。(私は山形訛りの噺家になっていたかも知れないのだ)。



1 相撲部屋と寄席小屋

1-1 ローカル岡との出逢い

水産業界を経て私は、本社が大阪にあるミノルタカメラに拾われました(注8)。貿易部に席を設けて戴き、3年間で、先ず精密機器業界全体、そして社内の開発、生産部門の業務内容、併せてカメラとその周辺機器を主要商品とする貿易実務のイロハを

学びました。開発部やレンズ工場、カメラの組立工場には結構行きました。欧州担当の私は、ヨーロッパ各国から年1回、4～5日の日程で代理店の社長や幹部が来日する度に、滞在中のアテンド役を任されました。「早く会社に慣れて欲しい」との配慮からです。工場では管理職にある人が「珍しい人が来た」と歓迎し、組立ラインの女工さんたちは親しくして下さいました。夜は、料亭～クラブとお決まりのコース。

“北の新地”を歩いているとボーイが、「サーちゃん」と呼び掛けます。(驚きました。昼はササキ君、夜はサーちゃん。昼の顔と夜の顔は、名前まで変えるんですね)。立派な社用族に育っていました。開発、生産、営業の各部門に通じ、夜の「クラブ活動」で体力もついてきた頃、渡欧を言い渡されました。ヨーロッパのヘッドクォーターがあるドイツを中心に各国への出張が頻繁にありましたが、約5年のフランス駐在を終えて帰国。勤務先は本人の希望で、浜松町にある東京支社となりました。

今も変わりませんが、大相撲の千秋楽には相撲好きが畳の部屋に集まり、お相撲さんと飲み交わすのが恒例となっています(注9)。その打ち上げで、漫才をしていたローカル岡(注10)に出会ったのです。飄々とした雰囲気、「今度、浅草に出ますから来られませんか？」とのお誘いです。その当時、東京では、上野・鈴木演芸場、新宿末広亭、池袋演芸場、国立演芸場、そして浅草演芸ホールが定席と言われておりました。これらの寄席は、いつ行っても演芸を楽しむことができるからです。15年ほど東京を離れ、お笑い界に疎くなっていた私に、浅草は派手な身拵えで迎えてくれました。ありし日の浅草六区を偲ばせる数本の幟が揺れ、前座、二つ目の、呼び込む声が威勢よく響いています。木戸を通ると場内の笑い声が心地よく耳に入りました。

ザ・ローカルの漫才を楽しんで楽屋に伺う頃には、小南から薫陶を受けていた時代を思い遣るなど、“寄席の世界”の端くれ気分です。「そうですか、小南師匠を良くご存じなんですね」。話せば話すほど小南のお弟子さんなど、共通の知人・友人がいることが分かり気心は深まります。小南は落語芸術協会の理事職にあり、ローカル岡は本務がボーイズ・バラエティー協会でありながら“傑出の色もの”として芸術協会にも所属している芸人です。小南と私の関係を知ったローカル岡は、ギョウカイを知る人として私を、心腹の友と位置付けるようになります。

さて、どのような世界にも課題があります。水産業界、精密機器業界にもありました。お笑いの世界も例外ではありません。相撲部屋の打ち上げ時の雰囲気をそのままに、二人の信頼関係は醸成され、忌憚のない意見を述べる仲になっていました。「消費されるだけの高座は言うに足りない。何度聞いても新鮮で、後世に残るネタでなければ詰まらない」。利いた風な口をきいておりました。1988年に私は、セゾングループに移りました。勤務地の机は浜松町の世界貿易センタービル10階から、サンシャイン60(注11)の30階になりました。場所はJR池袋の東口です。

私の勤務先は JR 池袋東口の徒歩圏内ですが、ローカル岡の住まいは豊島区竹早町で、同じ駅の西口から徒歩圏内です。(東京に疎い私は、東口に西武百貨店が、西口に東武百貨店があるのは、なぜだ?の素朴な疑問が。まあ、いいか)。いつも驚きませんが、芸人さんは安くて味の良い店を知っています。ローカル岡の、「シェンシェ、馬刺しの美味しいお店が・・・」「シェンシェ、ドジョウ鍋のうまい所に・・・」の声に、浅草界隈を一緒に飲み歩く機会が増えていきました。そのまま竹早町のご自宅で寝入ることも度々です。そして、“一人我が道を進む”強気なローカル岡が、物思いに沈むようになっておりました。ある日、「シェンシェ、本を書いて欲しい・・・」。

I - 2 研究室で台本書き

1991年9月から私の赴任先は北九州市の大学(注12)になりました。大学サイドが構内に一軒家を準備しており、そこに住むことになりました。大学内に住むって不思議な感覚です。学生の姿がほぼ24時間あって、研究室、教室、レストラン(学生食堂)、講堂、スポーツ関連施設などが自分の庭にある感じです。研究棟2階奥左が私の研究室。そこに冷蔵庫を置き、時々食事をし、ソファをベッドにして寝泊まりする日が増えました。東京が第一自宅なら、大学構内の一軒家は第二、研究室が第三自宅です(二拠点は聞くが、これでは三拠点だね)。教育や学納金は、いつの時代も国民的話題の一つです。研究室から永遠のテーマである「教育ネタ」を中心に、台本を送り続けました。教育機関にいるのですから、「これで行こう」と決めたのです。

何かと雑用があって、月2回は上京しておりました。ローカル岡の高座も見るように予定を組んでいます。定席の一つ、池袋演芸場でのこと。いつものようにセンターマイクを前に、オーバーアクションは一切なし、ただ、頼りなさげに、おもむろにボソッと話す。「今日のお客さん、よう笑っているね」。朴訥としたテンポのゆるい調子です。「この台本書いた人、後ろにいるよ」。お客さんは、高座の芸人自身が考え、話していると思っていますから驚きます。視線が一斉に私を向き、恥ずかしさの余り軽く会釈をして俯いてしまいました。

他方、半年かけてデータを取り、それをベースに苦勞して書いたのに、師匠は切りに切って、15秒にまとめていた高座に出くわしたこともあります。私は不満です。

「何故あんな風に変えたのですか?」と聞くと、「あれは、あれは、あれ以上長く出来ないんだよ」。(ドラマに例えるなら、原作を生かし、別角度から価値を与えるのが脚本家の役割。原作に惚れて漫談化、漫才化するのではないのか。原作を利用したいだけなら言語道断・・・と一人勝手に熱くなっていました。両者の関係は瞬間的に微妙です)。芸人さんには一言一句書かれた通りに演じる者、少しだけ自分流にデフォ

ルメする者、書き手の考えと全く別物にしようとする者、大きく三通りに分かれるようです。

九州では日常的に、本務の講義が5コマ(1週間に5回の授業)あり、久留米大学と九州産業大学にも出講していました。ある日のこと、九州産業大学で教務担当の教授から「先生にお願いがあります。先生は通常の授業をされなくて結構です。受講生には、先生の経験話などを雑談風にお話し戴ければ有難いのです」。(うっ・・・? 一体どういうこと? ここでの私の立場は教育者、でしょ。「文化経済学」講座設置の依頼があったので、お引き受けして、講義概要、到達目標、評価方法、それに半期15回の講義計画も併せて提出済みなのに・・・)(注13)。九州産業大学は私の講義時間を、学生に面白・楽しく話す時間に? 教務担当の教授は良く知る先生ですが「この期に及んで何を望んでいるのだ」の気持ちが収まりません。(すみません。力が入り過ぎました。ここは怒りに任せず深呼吸して耐えます)。

1-3 寄席最後の色もの

九州産業大学は博多駅の近くにあります。従って、授業が終わると希望する受講生と博多駅の地下で一杯交わし、雑談を楽しむことは可能です。福岡一羽田の移動に最終フライトを予約し、学生さんと語り合える時間を確保しました。非常勤手当は、こうして学生さんにお返しする、と決めていました。「面白い話・・・」は不本意でしたが、学生さんとの会話には教育ネタが満載でしたし、これで大学教務のご希望に、少しはお応え出来たと思います(注14)。

ローカル岡が「宮崎で大助・花子と一緒にだった」と、帰京途中に北九州の拙宅に4~5泊し、私の講義を聞いたことがあります。「シェンシェ、あの授業じゃ学生眠るよ」(何という物言い! でも、聞き手を一瞬で惹き付ける、鬼才漫談家ローカル岡のコメントです。心に留めさせて戴きます)。折角の機会です、夜はゼミ生と懇親会を開きました。ローカル岡は至極ご満悦、学生も大喜びです。その時、こっそりと耳打ちされました。「シェンシェ、俺、高校中退だから、学校は中卒なんだ」。その囁きに私は「師匠、今晚は学生さんと楽しもう!」。次頁の冒頭が当時の写真です。



前期講義も終盤、それに伴う試験の実施と成績表の提示、設立されたばかりの文化経済学会〈日本〉の運営、同学会九州部会の設立準備など諸々の仕事がありました。日仏経営学会での学会発表があり、その後、『紀要』（第17号、2000年）への論文入稿、同時に、外部から各種委員会への出席、執筆、講演(注15)依頼。その合間をぬって世相風刺を入れた台本を書き、ローカル岡に送り続けました。私は彼の高座にゾッコン惚れておりました。チョット横から押せば倒れそうな細身の体に蝶々絵柄のネクタイ。身振り手振りはない。「飄々とした風袋に茨城訛り」は、キャッチコピーになっていました。とぼとぼと寂しげに歩いてセンターマイクの前で立ち止まる。おもむろにお客さんに目線を流す。この仕種だけで寄席のあちらこちらから「うふっ、うふっ・・・」と漏れ聞こえる声。高座に現れるだけで「話し手」と「聞き手」のコミュニケーションが成立していました。このレベルになれば凄い！ローカル岡は寄席の人気者で、私は彼が業界で目立つことを、内心とても喜んでおりました。放送作家の高田文夫も「ローカル岡は最後の“寄席の色もの”かも知れない」（毎日新聞、2005年6月9日）と高く評価していました。

2 広がる芸人との交遊

2-1 芸人が集う寿司常

上京時に会う場所は池袋の寿司屋「寿司常」と決まっていたのですが、お気に入りのカウンター席に座っている、初老の紳士がおられました。自己紹介が「役所広司の父です」。この方は、午後でも、夜でも、いつ行っても寿司屋のカウンターでほろ酔い気分です。柔らかな物腰で、話し方は穏やか。とても幸せそうです。ちょくちょくお会いするので、親戚以上のお付き合いになります。

さて、ある日のこと、その寿司屋の奥まった座敷に20人ほどが座っています。見慣れた顔です。「皆さん大勢でどうしたの？」と尋ねるとローカル岡、「シェンシェが東京に来るんで集めといた」（チョット・チョット、それって日常茶飯のことですが、やはり乱暴ではございませんか）。ほどなく、ボーイズ・バラエティー協会所属で時間の空いている芸人さんが、私の単身赴任を労うための集いであることが分かりました。皆さんは本当に優しい！若菜春夫(注16)、東京ボーイズのリーダーでボーイズ・バラエティー協会副会長の旭五郎、モダンカンカンでサキソフオンを吹き、協会では会計監査を担う島影正人、紙切りの泉たけし、司会の松田洋子、ぶっちゃけ放談の豊年万作、踊るマジックの喜多恵子、坊主漫談の甘味けんじ、神主漫談の水島敏照、サザンクロスが生田目章彦もいる。

2-2 いか八朗、怒りを買う

ところが、いか八朗(注17)の一言で場が凍り付いた。「岡ちゃん(ローカル岡は業界で、そう呼ばれていた)は先生のお陰で有名になったね」と、ストレートに言ったのです。格段に仕事が増え、テレビやラジオに出ることが多くなっているローカル岡。周りに「お前もシェンシェに『書いて欲しい』とお願いしなよ」と言っているのを聞いたことがあります。彼を傍に「お願いします」と丁寧に依頼される芸人さんもいました。(しかし、こっちは師匠の芸に惚れて書いています。私の力量不足に依拠しますが、芸風が好きでない人に書くのは難しいんですよ)。私は自由気ままに、何の縛りもなく、無償の奉仕で裏方に徹することを善しとしておりました。

映画やお芝居には、脚本家があり、俳優がいます。作詞家、作曲家がいて歌手がいます。ベートーベンやシベリウスがいてオーケストラ団員の演奏があります。これらを私たちは、映画、お芝居、コンサートで承知しています。映画館の字幕、パンフレット、アナウンスでの告知もあります。しかし、お笑いには、それがありません。お笑いの台本作家として有名な一人に、永六輔(1933~2016)がおりました。業界では知られていましたが、例えば高座で「それでは作・永六輔による・・・」など聞いたことありません。本なしで高座は成立しませんから、芸人とお笑い作家は運命共同体です。ただ、肝心なのは、芸人自身が芽吹かせ、育み、芸の域に持って行く逡巡のない胆力です。世の中にはホンモノとウソモノがあります。ホンモノの芸人はゴールのない努力に励み、才能を磨いておられます。言葉遣い、声の出所、出身地のお国訛り、表情などの動き、衣装でつくるイメージ、人となり・・・。

ローカル岡はホンモノの芸人です。ところが、いか八朗、悪気はなかったのですが、ストレートに「先生のお陰」などと心象を害する物言いをしたのです。結果、ローカル岡は気色ばみ、「いかちゃん(業界での彼への呼び名)、今日あんたを呼んでいないよ。何でここにいるんだ」と、怒りを買ってしまいました。(いかちゃん、私を見詰めて助けを求めているような・・・。可哀そうです)。ローカル岡は、浅草演芸ホール4階にある東洋館の顔付けを担っていました。「来月はシェンシェを出すからな」と大声を張り上げ、戸惑うことができました。(なぜ勝手に決めるの?そんな自由に動けませんよ。それにしても、いかちゃん、顔付けで意地悪されないかなー)。

演者の技量に触れたい。丁寧に生きる中で言葉が生まれます。言葉のお陰で私たちは丁寧に生きることが出来ます。私たちは言葉によって関係を築きます。だから言葉は大切な“生きる力”なのです。高座は言葉だけでなく、時には様々な道具を使ってまで「話し手」と「聞き手」のコミュニケーションを図ります。「話し手」は自分の意見や感情を、成り行き任せで伝えてはいません。その言葉は体系的に整理されてい

ます。言い換えるなら、高座の良し悪しは、客観的、科学的手法に拠って、言葉が系統立てて整理されているか否かにかかっているのです。伝える対象は、意志、感情、知識で、高座ではこの3要素が、正しく、強く、美しく伝わる必要があります(注18)。私たちの日常のお喋りとは全く別物なのです(注19)。

2-3 牧伸二からの箴言

台本を書いては送っている折も折、ローカル岡から「シェンシェ」と連絡が入りました。「一緒に漫才をしないか」との度重なるお誘いです。牧さんから言われていました。「大学の先生は話すのが下手だからなあ」(注20)。その口調から“情けない”“哀れ”“不憫”の気持ちがありありです。(大学の先生でお話しの上手な方もおられます。が、天下の牧さん相手です。14万人の大学教員を代表し、見捨てられた気持ち・・・♪あ～あイヤになっちゃった。あ～あ、ああ・・・驚いた)。牧さんの言うこと、分からないではありません。教員は人前で話すことが必須なのに、私が知る限り、自分の本業である研究内容を話し言葉でどう伝えるか・・・時間をかけ考えている大学教員は少ないようです。口の重い人、口不調法な教員が、コッソリと英会話教室には行っても「日本語の話し方教室」に通うなど微塵も考えられません。多くは自分のペースで、ただ一方的に話しまくります。これが学生相手になると不幸な事態が起きます。教員の一方的な講義に、受講生も一方的な動きを見せます。突っ伏して寝る者、スマホに触る者、講義と別のことをする者、出席カードに名前を書いたら友人に託して早々に退室する者、講義終盤に入室し講義を止めてまで「先生、出席カード!」と言って教壇から離れない者、弁当を出して食事をする者、おっ手鏡を取り出して化粧を始めたのも・・・。これは私の教室での出来事ではありません。私の教室は履修生が450人いても異常なほど静かでした。学生から聞いたことがあります。「先生の授業はお通夜です」「??・・・他の授業ではどうなの?」「お祭りです」。

脇道に逸れてしまいましたが、お笑いの台本を書く者と高座に立つ者、これは、至近距離にあるように見えて、実は異世界にあります。しかし業界の先達からは、「頼まれごとが舞い込んだら、お引き受けしなさい」と教え込まれてきました。負担が大きい、忙しい、面倒だの・・・そのようには考えず、「困っている人がいたら、寄り添いなさい」と言い含めて下さる先輩がおりました。デビューは7月31日(土曜日)の、第18回ボーイズ・バラエティー大会特別興行(新宿末広亭)と決まりました。11時50分から16時30分の昼の部と、16時50分から21時30分までの夜の部が、昼夜入替なしで行われます。「シェンシェ、芸名はどうする?」「師匠がローカルだから、私はグローバル晃彦でお願いします」。数日後、「シェンシェ、芸名が決まりました。ローカル晃彦でいきます」(??グローバルではなくて、ローカル・・・か。良いけど、それなら、なぜ私に聞いてきたの?)。知らないうちに、似顔絵入りのTシ

ヤツやステッカー、千社札、名刺・・・いろいろなグッズが作られていました。費用はローカル岡の負担です。師匠と一緒に交通機関を使うと「シェンシェは俺の弟子だからね、電車代は師匠の俺が出す」(チョット、上から目線じゃないの？そういう世界に入ったのか・・・。シェンシェになったり、弟子になったり、私は忙しい)。そうこうしているうちにローカル岡は自分の事務所、演芸室をつくっていました。おやっ、所属芸人にローカル晃彦の名前！(注 21)。室長は恵子夫人です。

3 初高座を前に

3-1 殺到する取材と猛稽古

1999 年前期は本務で「文化経済論」(履修者数：167 名)、演習 1/2、夜学の演習、そして久留米大学で「文化産業論」(履修者数：157 名)の講義が入っておりました。ボーイズ・バラエティー協会の広報活動に依るのでしょうか、7 月に入るとマスコミ各社から取材要請が入りました(注 22)。前期授業が、まだ残っています。そして 7 日(水)は 13 時に学科会議。14 日(水)13 時に教授会、16 時 30 分からは留学生交流会。15 日(木)は 10 時 30 分に福岡県市町村の課長研修で講演。16 日(金)～17 日(土)は泊まり込みで佐賀県に出張。佐賀から福岡空港直行で、同日 20 時 20 分発の福岡一羽田便で上京。18 日(日)はローカル岡師匠宅で台本の打ち合わせ。19 日(月)は 9 時 30 分に大手町の読売新聞社へ。解説部の取材を受け、12 時 10 分発の羽田一福岡便で移動。22 日(木)は 13 時 30 分から久留米大学で担当科目の前期定期試験、引き続き 18 時に博多座へ。大地麻央主演の「ローマの休日」に学生時代からの友人が出演しており、終演後は楽屋で歓談。そして博多の、夜の街へ。23 日(金)は、朝から本学前期定期試験の補助監督。24 日(土)13 時 30 分から進化経済学会九州部会が九州産業大学であり、発表。夜は北九州市の響ホールでコンサートを堪能。本務校担当科目の前期試験と評価提出も、当然外せない仕事です。(ゴメンナサイ、ダラダラと書きちゃって)。

28 日(水)20 時 20 分発の福岡一羽田便で上京。翌 29 日(木)の 13 時 30 分から漫才の稽古です。場所は東池袋 1 丁目のパークサイドビル 5 階にある日本演芸家連合の事務局。局長が若菜春夫であることから、業界人は「若菜事務所」と呼んでいました。この世界にあっては願ってもない二人の指導が、19 時までの 5 時間半、休憩なし、立ちっ放しで続きました。翌 30 日(金)も 12 時 40 分から真夜中まで稽古です。若菜春夫が親切に、と言うより執拗に駄目押しを繰り返し(ゴメンナサイ若菜さん、この文言はイケマセン)、声の被せ方、振付ほか諸々の指導です。ローカル岡が「駄目だよ、ダメ！」と声を荒げます。「お笑いと落ち(注 23)は一体。上手くできないのを

業界では“落ちこぼれ”って言うんだ」「間の取り方が下手な人は？そう、“間抜け”だ」「笑いを取るのと笑われ者になる、これは全然違うぞ」（少しは慣れてきましたが、いつもの厳しいお言葉ではあります。出番は明 31 日（土）の 19 時 15 分～25 分の 10 分。う～ん、参ったなあ）。フジテレビから自宅に電話が入った。「当日朝からご自宅を伺い、カメラをまわして夜の特集に組みたい」。丁重にお断りした。（自分の本なのに、台詞が出て来なかったらどうしよう。相方が打ち合わせと違うことを言ったら・・・、あーあ、もう逃げも、隠れもできないなあ。テレビ？もう勘弁して下さいよ、そんな場合じゃないんだ！）

3-2 優しい芸人仲間

第 18 回ボーイズ・バラエティー大会特別興行の当日。私は JR 中央線に乗り、17 時頃末広亭に到着しました。通常は自分より前の出番の芸人さんが、スムーズに着替えなどの準備ができるよう、早目の楽屋入りを避けます。出番の 30～40 分前くらいを見計らって入るのが礼儀です。



特別興行当日は、正面木戸口から末広亭を囲むように、長い列が連なっていました。入口周辺は混雑を極め、親しい芸人さんが「マスコミがいっぱい来て大変な事態になっている」と教えてくれました。「高座に上がる前の私を取材したい」と申し込んできたマスコミも数社いました。もう一度台本を確認したいのですが、取り敢えず芸人さんへの迷惑を回避させなければなりません。裏手 2 階の喫茶店で取材を受けることにしました。喫茶店のカウンター席には福岡・飯塚市でオートレース事業担当の市幹部がいた。（わおー、九州からも来ている！）。ジャパントイムズ、故郷の山形新聞は東京支社の桑嶋誠一編集部長が・・・。写真雑誌『FOCUS』の記者がカメラマンと来ていた。撮影するその瞬間、同郷のケーシー高峰（注 24）が色鮮やかな服装で現れた。ボーイズ・バラエティー協会会長の灘康次（注 25）も見えた。踊るマジックの喜多恵子も後ろで私の頭を撫でている。（皆は楽しそう。私？・・・もう疲れちゃった）。

19時15分の出番が近い。師匠とお揃いのネクタイを締めなければならない。喫茶店から降りて楽屋に駆け込むと、玉川カルテットの面々がステテコ姿でトランプに興じている。女性用の楽屋がないので、喜多恵子は下着姿であちらこちらと動いている。肩を叩いて囁いているのは、だ～れ？ 呟くように「ビートきよし(注26)です」。高座ではビートたけしの“いじられ役”を演じた彼が、余裕ゼロの私をいじくって微笑んでいる。彼もケーシー高峰同様、故郷の山形出身です。私のあとにバラエティー・ボーイズ協会に入った腹話術の、いっこく堂(注26)は相撲界なら同期入門のような間になります。今日の興行では出番がない彼も、激励に駆け付けてくれました。みんな、ありがとう！



3-3 記録的な入場者数

協会に所属する芸人は約130名。当日は、そのうちの38名が、昼夜19人ずつに分かれて出演しました。11時50分開始の昼の部トップは売笑人の、いか八朗。ハーモニカ&タップの、ムッシュタケウチ、声帯模写の丸山おさむ、相撲甚句の国錦耕次郎と佐藤幸子、歌謡漫談の岡本圭司とバラクーダ・・・と目まぐるしく変わり、玉川カルテットでお仲入り。みんな私の好きな芸人さんだ。お仲入り後は歌謡漫談の小島宏之でスタートし、飲み友達のアングルベイビー・・・昼の部の締めはボードビリアンの坊屋三郎(注28)で、終演時間はキッカリの16時30分であった。

16時50分から夜の部がスタートした。トップは、ぼんおどりの石黒サンペイと広田実。石黒も山形出身だ。漫談の清水英彰、マジックの喜多恵子、浪曲漫談の大空かんだ、漫談の前田隣・・・、そして、ついに、出番がやってきた。ローカル岡が一人先に高座に上がった。チョット軽めの笑いを取ってから私を呼ぶことになっていた。私は2~3分、袖で待つことに。そして「では皆さん、お待ちかね、ローカル晃彦をお呼びしましょう」。場内は人でギッシリ。一階奥はズラリとカメラのレンズ。昼夜入替なしの興行であるが、定員300名の末広亭に636名の入場者(注29)が記録されて

いた。いつもは閉めている2階席を開け、入ったお客さんの数は1999年の末広亭の記録であったとか。北村幾夫・末広亭社長が私に「高座に上がりたい時は、いつでも言って下さい」と話しておられたが……。当日の空気感は、次項のマスコミ各社の記事に委ねたい。



3-4 新聞、雑誌社の反応

「ローカル晃彦です。宜しくお願いします」と教授が声を張り上げた。相方の岡さんが「恐れ多くもこの方こそ、あの有名な大学経済学部の教授です」と紹介すると、どよめきと共に大喝采。観客約500人の視線が、異色の漫才師に集中した。

岡「ところでシェンシェは何でも知っているか」

晃彦「知っていることだけは知っている」

ちらほらと笑い。つかみは少々外したようだ。日本の飽食の風刺に話は変わる。日本の食糧自給率が40%で、輸入は60%と教授がやや講義調で話を続けた。

岡「そのくらいは俺も分かる。やっぱり日本の食べ物が良いね。天ぷら蕎麦を食べよう」

晃彦「エビはインドネシアで、ころもはアメリカ」

岡「じゃあイカは？」

晃彦「西アフリカのモーリタニア・イスラム共和国」

岡「みんなアフリカのものを食べてんだってね。じゃあ刺身だ。タイは？」

晃彦「タイはタイ」

笑いが脹らむ気配。

岡「いい講義ですね。俺が喋ると笑うのに、教授の場合はワーッ(納得の溜息)だね」

晃彦「日本最大の漁港は何処か知っていますか？」

岡「焼津？」

晃彦「残念でした。成田です。成田は空の港だ」

輸入牛が市場で和牛に変わり、輸入の山菜を小分けした包装に詰め替えると原産地表示が消え、各地の土産物に化ける。教授が講義調で話し続け、岡さんがちゃちゃを入れて笑いを取る。ボケとツッコミのリズムは問題ない。

岡「学校では何分やるの？」

晃彦「90分」

岡「俺のところは15分だぞ」

晃彦「師匠は楽な仕事をしているなあ」

場内からどっと笑いが起きて、約15分間の漫才が終了した。

師匠の特訓を受けて、何度も間違え、励まされながら台本とにらめっこ状態で頭を抱えていた教授。本番はよどみのない喋りだ。新人の学者漫才師に観客は大きな拍手を送っていた。初舞台を終えた教授は汗だく。「呼吸しているだけで精一杯。師匠が助けてくれた。まだまだです」と反省の弁。「将来性はあります。今日のところはこの程度でいい」と、にっこり笑って及第点を与えた。

以上、西岡聖雄「熱血教授 初高座」—お笑い講義の事始め—

(東京新聞、1999年8月1日)



かつて、落語家の桂文珍師匠が大学の非常勤講師デビューした時、その夜のテレビでニュースキャスターが、つい「非常識講師」と口走り、冷静に「非常勤」と言い直したのは実話。落語家が教壇に立つんだから、教授が寄席の高座に上がったって、不思議はない……。新聞、雑誌、テレビ、英字紙と取材が殺到。裏の喫茶店ではケーシー高峰さんも励ましに。しかし「話をお笑いの話芸に昇華させる難しさを実感した」「自分の力量不足を納得した」。でも、もうコリゴリのように、ちっとも見えない。今度の新しい引き出しは、奥が深い……。

以上、奥成繁「経済学部教授が寄席で漫才」

『FOCUS』（新潮社、1999年8月11・18日 盛夏特大号）

本業は大学教授だが、91年に現職に就くまで、転職6回、海外渡航先60か国、転居数は35回という異色の人。大学教授が寄席の高座に上がったのは、慶大教授時代の永井荷風以来2人目とか。「安全・安心・安定」を嫌い、「地球に立てばどこも同じ。一日2食と寝られる場所があれば後はおまけ」という独特の人生観も、どこか荷風に似ている。趣味は海外放浪。旅先は行き当たりばったりで、宿泊先も予約はなし。現地の人と同じ乗り物に乗り、地図にもない村に行き、幼稚園、小学校を訪ねる。「タイの首長族の村では2人目の外国人客と大歓迎され、ミャンマーとの国境付近の村では、象の頭に乗って調教してきました」。ありきたりの場所には、ありきたりの楽しみしかない。人の行かない道を歩き、別の世界を覗いてきたからこそ、こんなエピソードを山と持つ。初舞台はホロ苦だったが、これくらいではへこたれない。横浜、上野・広小路亭と高座を重ねて、次第に掛け合いにも息が合ってきた。

以上、「漫才師としてデビューした現職の大学教授」

『痛快生活練習帳一団塊の世代への提案一』（旺文社、1999年10月24日）

一文化経済学に取り組んでいますね。

「従来の量的志向の経済は限界が来ている。人間の脳が右脳と左脳が程よくバランスが取れて機能するのと同様に、経済も文化と刺激し合っていく必要がある」

一著作が企業メセナから公営競技論など幅広いテーマです。

「8年前から企業と文化のインターフェースの研究に取り組んでいる。美術館づくりなど文化にとって経済的な考察が欠かせない。公営ギャンブルも本質的にはサービス業なのに、設備など文明的贅沢に傾斜し、対話性など文化的贅沢は満たされていない」

一文化経済学に取り組むきっかけは？

「20年前、フランス法人に赴任する時、荷物のコンテナが盗まれ、現地でミカン箱を食卓に一家が食事をせざるを得なくなった。モノが持つ限界を実感し、それから旅行、食事など、楽しむコトにお金を使うようになった」

一文化経済学をテーマに漫才をされました。

「俳優の金田龍之介さんや相撲の尾車親方(元大関・琴風)らとの付き合いを通じてお笑い芸人と知り合い、親しくするなかで『高座に上がって欲しい』という話になった。大学の講義や講演は聞き手がテーマを想定して聴いているが、漫才は様々な職業、年齢層の方々が『何を語るのだろうか』と期待しながら聴いて下さる。ここは決定的に違う。兎も角、お客さんと共感でき、相互に反応し得るプロセスが生まれるなら、学問が漫才の形をとってもおかしくないと考えた。

以上「個性」物質偏重から脱皮訴え

聞き手：岩村卓（日本経済新聞、1999年10月4日）



「文化や経済を勉強しに来たわけではないお客さんに、先ず直感的に納得して戴かないと笑いは取れません。とても厳しい世界です」。新聞・テレビから写真雑誌まで取材に訪れ〈経済学部教授が寄席で漫才〉と騒がれた。しかし佐々木さんには時の人という意識は全くない。「面白い人がいるね、では困ります。私は真剣にやっているんですから」と笑う。大学人と芸人とは別の「引き出し」で、それを使い分けられている。専門の文化経済学、芸術経営学分野では、監修した『芸術経営学講座』（全4巻、東海大学出版会）が完結したのに続き、現在、池上惇・京都大学名誉教授と共同監修で『文化経済学ライブラリー』（芙蓉書房出版）を刊行中。単独の著作も精力的にこなしている。「一日を、知識の習得に三分の一、考えることに三分の一、発信に三分の一使うよう心掛けています。私には、一般市民社会とのコミュニケーションの一つの手段として、漫才があるわけです」。学者・教育者と漫才師—この二つの「引き出し」は全く異質のように見えて、常に発信者であろうとする佐々木さんのなかから「押し出される」エネルギーが違う形を取ったに過ぎないようである。

以上、「人」漫才で文化経済学を発信

『経済セミナー10』（日本評論社、1999年10月）

今夏、写真雑誌やスポーツ紙をにぎわせたローカル晃彦こと、佐々木晃彦さんが北九州から久しぶりに上京した。横浜、上野の寄席も無事こなし、余勢を飼って、地元九州では9月からRKB毎日放送の『安藤豊の夕方どんどん』のレギュラーコメンテーターに抜擢された。本業の方も、『豊かさの社会学—変革の時代の生きがい求めて—』（丸善ライブラリー）、『公営競技の文化経済学』（芙蓉書房出版）などに続き、18冊目の著書となる『文化産業で何がわかるか』の原稿を、企業メセナ協議会主催のメセナ大賞レセプション（東急 Bunkamura）に出席する直前に渡したばかりとか。酔酩ぶりも納

得。「大学教授は全国に 14 万人、900 人に一人は大学教員だが、漫才師はせいぜい 100 組、200 人ですからね。天才集団なんだ。わがギョウカイは」と、やたら興奮している。師匠の顔を見るなり「次の舞台は？」仕事の催促である。「うん・・・来年の夏、国立演芸場の前座で漫才をやろう。そうだ教授は、九州に移る前は美術館のコンセプトづくりをやっていたな。よし、美術館をテーマに漫談もやってくれ」。晃彦さんの喜び尋常ならずで、明け方まで新宿の文壇バー「風紋」とつきあわされた。

以上、日高邦夫の人生二毛作

—漫才デビューの大学教授 波乱万丈転職 6 回人生—

『週刊東洋経済』（東洋経済新報社、1999 年 12 月 4 日）

高座を降り、2 階の楽屋に戻って着替えを済ませると、直ぐ、TV、新聞、雑誌などの記者で埋まりました。たくさんのメディアの方々のご自身の視点でお伝え下さったこと、とても有難く嬉しく思っております。興行当日、末広亭には、持ち帰れないほどのお花や祝電が届きました。木戸口には「会いたかったけど余りにたくさんのマスコミがいて、とても無理と思いました。楽しみました。ありがとう」とメモ書きを置いて行った方もおられます。本来なら高座を降りて直ぐ、出口に走って行き、お礼をし、お見送りをしたかった。お会いできる貴重なワンチャンスを逃したこと、それが今も心残りです。メモは大切に保管しています。こうして、こうして私は、不義理を繰り返している。



4 高座後の大学

4-1 止まらない電話

7月は忙しかったが、あれは序の口でした。高座後の報道に火が付き、取材が続きました。先程の記事はホンの一部です。大学教務からは「外からの電話で仕事にならない」と、不満を語る人がいました。大学は経営と教学が支え合って運営されますが、色々な意見がありました。経営サイド(理事長がトップ)からは、「ここは地方の大学、少子化も進んでいる。この媒体量を宣伝費に換算したら・・・」と、「露出大いに結構」の本音が出る。教学サイド(学長がトップ)の渡辺明学長(注30)は、いつも私の味方でした。「先生は授業以外の、例えば学内の雑用は一切しなくて良いです。外からの要請に対応して戴ければ、それが結局、大学のためになるんですから」。実際、新入生へのアンケートで分かったことですが、「新聞や雑誌で読んだ」と入学した学生がおりました。「ゼミ(注31)に入りたい」と要望があり、他大学に学籍を置きながら正式手続きを経て、ゼミ履修をした学生もいました。

佐世保競輪から解説の依頼が入りました。RKB毎日、NHK北九州局、KBC九州朝日放送・・・と切ることがない。競艇専門誌『マクル』(ネプラス、2003年10月)の特集「競艇構造改革」で“文化経済学から観た競艇改革”を主題に「水をテーマの文化施設へ」「競艇場のデザイン意識不足」を指摘、自論を展開させると、私の知らない他学部学生が「先生、読みました」と声をかけてくる。(ええっ?大学生が芦屋競艇場に行って舟券を買っているの?)。『相撲』(ベースボール・マガジン、1999年12月)のリレー相撲エッセイ「触れ太鼓」では、経済合理性、損益分岐点、方法的懐疑、ノマダイズムの視点から拙文が掲載されていた。このような各種雑誌での露出が高校生に及んでいることへの気づきが、私には多少欠けていたかも知れません。兎も角、ボーイズ・バラエティー協会会員として、日本演芸家連合発行の『会員名簿』に文化世相漫談ローカル晃彦で載り、教壇と高座という異質な2領域のスケジュール管理を行っていた時期でした。

4-2 ズレの理論—その例示—

「笑いは良薬」(注32)と聞きます。2024年、山形県議会が一日一回笑うことを努力義務とする条例を成立させました。笑いの嫌いな人はいません。「日本笑い学会」(注33)の設立も頷けます。世の中の不条理に“くすぐり”を入れ、笑いを取りながら弾む会話は楽しい。その笑いを取る方策の一つに〈ズレの抽出〉(注34)があります。

医者イメージは職業上、沈着冷静で清潔、そして人助けの親切心です。それが慌て者で不潔、患者対応がいい加減で失敗ばかりしている。心配が先立ちますが、少し

笑えます。世間共通のイメージとズレがあるからです。ラブホ不倫の文科政務官がいました。薄笑いです。税金滞納常習犯の財務副大臣がいました。苦笑いです。違法なネット広告に関与した法務副大臣がいました。笑えません。女性にキスを強要し体を触った防衛政務官がいました。笑えません！！この国は、防衛政務官から我身を防衛しなければならない国なのですか？驚きと怒りで言葉が見当りません。しかし、このような不祥事が起きる度に「適材適所」と繰り返す人がいます。笑いを取ろうと考えた末に選んだ言葉でしょうか。お笑い作家並のセンスに、呆れて笑えます。所得税の税務調査で、業種別の申告漏れ平均額は、経営コンサルタントの3367万円、これって前年に続くトップです(国税庁、2022年事務年度)。笑えません。京都府警は捜査で訪れた住宅内で現金を盗んだ警部補を、窃盗の疑いで逮捕しました。警部補は捜査ではない、血眼で金品を探していたのです。もう怒りです！華やかな宝塚歌劇団ではイジメと過酷な労働がありました。泣いてしまいます。

欲しいのは朗笑。晴れやかな様を表す〈朗〉の一文字。(私は妻を「朗妻」と呼んでいます。ワタシ？「朗人」を目指しています)。高座は、風が波を起こすように“言葉を発すれば問題を起こす”世界とは真逆の、“言葉を発すれば幸せ時間を起こす”世界でなければなりません。高座に上がる芸人と最前線に居るお客さんの交流があれば、なお結構です。2003年、楽夢会が正式に結成されました。

4-3 楽夢会の歩み

「楽夢会」(会員約80名)事務局長の若菜春夫が、会の広報紙「楽夢 No.74」(2021年4月15日)に書いた楽夢会発足の経緯を転載します。「国立演芸場の帰り、出演者とお客さんの打ち上げを池袋の寿司屋で行った。同伴者同志以外は殆ど初対面で、社長、ママさん、商店主さん、料理人さん、弁護士さん・・・と多士済々。

団欒の最中、大学の先生が「こんなに色々な人がお集まりになるのなら、いっそ同好会をつくったら如何でしょう」と提案。酔った勢いもあり、皆が賛成・署名した。イベントもやろうということになり、後付けですが「異業種人の交流・親睦」を趣旨に発足した。当初はローカル岡の命名で「可笑しい会」としましたが、1年で「演芸を楽しむ会(通称『楽夢会』)」と改名した。入会に性別、職業は問わず、以降、初めて参加した方は、2度目の参加で正式会員になる気楽な集まりです。会員は浅草を中心に活動する芸人と、演芸が好きな人たち。芸能会員の舞台応援、温泉バス旅行、忘年・新年親睦会、暑気払い・・・そして、楽夢会の自主公演『池袋演芸祭り一唄と笑いの池袋バラエティー』も数回行っている」

私の拠点は九州にあり、いつも楽夢会に出席できるわけではありません。発足後しばらくして、放送作家で演芸作家の遠藤佳三(注 35)が参加するようになりました。ギョウカイを牽引されて来た方です。ご一緒して驚いたのは、常に小さな紙片と筆記用具を持っておられること。お喋り中の笑顔を絶やさない穏やかな顔に、一瞬緊張感が走る。と、直ぐメモをする。頻繁に小さな紙片を出してはメモを繰り返します。



「もう一步」「あと一步」と自分を追い込んでいた相方のローカル岡、彼はもういません(注 36)。『池袋演芸祭り』ではピンで立たせて戴きました。実は学生時代から、五代目春風亭柳昇(注 37)のトロンボーン漫談が好きでした。柳昇の高座に触発され、演芸祭りの構成責任者、若菜春夫に相談しました。若菜はトロンボーンの使用を寧ろ喜び、台本も書いて下さいました。当初は私一人で立つ予定でしたが、サザンクロス(注 38)の生田目章彦から「センターマイクに行くまで、ギターで伴奏しましょう」と提案も。漫才デビュー時、取材陣を前に「いずれ一人で立って欲しい」と語っていたローカル岡。仲間力をいっぱい借りて、その約束を果たすことが出来ました。

おわりに

何の準備もしないで、フラリと当日に行く。木戸でお金を払い、あとは気分が満ち足りるまで居続けて良い。落語二つ、色もの一つ、落語二つ・・・の高座が、一人(一組)15分程度で進行する。あたかも駅伝の襷掛けのように、前座から二つ目、そして最後のトリまで襷を繋ぐ。相撲の取り組みも、前相撲、序の口から・・・最後に横綱

が土俵に上がる。そうです、トリは、その日の顔です。寄席の一日は全体が一つの物語となっており、その世界観がお客さんを温かく包む。

アリはお互いに情報を発信し合い、生きています。草原に棲み分けしているライオン、キリンなどの動物、生活の場が大空の鳥も、仲間同士しか理解できない「コード」を使い、コミュニケーションをしています。さて、ここは動物や鳥ではない、人間のコミュニケーションがテーマです。大学の教壇も寄席の高座も、言葉を使う点では一緒ですし、数百人を前に話すことにも慣れています。当日まで10数時間に及ぶ口合わせ(筋の流れの相互確認)と立ち稽古(舞台を想定したジェスチャー)の指導を、ローカル岡と若菜春夫から直々に受けて臨みました。私には“涙の特訓”でしたが、自覚していた課題は容易に解消できない奥深いものでした。紙幅の都合から、大学の講義と高座の漫才の違いを、3点だけ述べさせて下さい。

漫才では、どのような観客でも共有できるテーマを選びます。次に、厳選した言葉で、一つのテーマを400字程度にまとめています。最後に、相方の喋りは最後まで聞かない、喋りが終わる前に言葉を被せる、以上の3点です。このなかで、“相方の喋りを最後まで聞かない”ことは相当厄介でした。大学では授業計画に沿って講じるので、受講生は当日履修するテーマが分かっています。次に、教員は一つのテーマを約10,000字使い、90分で解説します。教室で聞き手が置かれている状況(学力や受講科目への関心度)は、ほぼ一緒です。私たちは幼少時から「話は最後まで聞きなさい」と躰られており、意見があれば講義が終わってからという双方の了解もあります。

初高座で私の体がどうなったのか、少し述べたいと思います。話したり、書いたりする場面を想像して下さい。私たちは与えられた持ち時間や原稿の文字数を計算し、玄関から入り、廊下を通り、サロン、食堂、寝室と部屋割りを意識したメッセージを流します。しかし、漫才では、相方が導入部を割愛したり、こちらの言葉を遮って、いきなり寝室に飛び込む時があります。助走なしで三段跳びをするようなものです。この繰り返しに、高座に上がって10分くらいで口が思うように動かなくなりました。それでも「漫才文化経済学」の高座は、学問が、学会発表、学術論文、或いは講義や講演など“了解された枠”を超え、貴重な時間を刻みました。ローカル岡という天才漫談家の脚色をベースに、ボケとツッコミが享受者との間に共感を生み、相互反応を示し、新しい世界観を見出そうとする試みです。高座と客席が共鳴し、一体化された世界です。ここでのコミュニケーションは伝達の道具に留まっていません。

楽夢会の皆さんとは今もご一緒しますが、それは至福のひと時です。これも50数年前になりますが、二代目桂小南との巡りあわせに依拠しております。「縁あれば千里」と言いますが、「縁は異なるもの味なもの」ですね。(文中の敬称・尊称略)

注

(注 1) 寄席の演芸は江戸時代につくられた。日本最初の寄席は、都内最古の稲荷神社である下谷稲荷神社(台東区東上野)で、初代三笑亭可楽(1777～1833)が開いたとされる。寄席小屋は文化年間(1804～1818)に江戸市中で 75 軒、それが弘化 2(1845)年には 700 軒に急増し盛況を極めた。可楽は櫛職人だったが、大工の棟梁、商人など昼の仕事を終えた者が夜、高座に上がることが多かった。可楽が始めた「咄の会」は、一門が寄席を借り年数回行う「勉強会」として今も残る。江戸時代は、浄瑠璃、小唄、軍書読、手妻(手品)、説教、祭文、物まね、相撲、操り人形、手踊り、錦影絵、軽業、足芸、人形芝居、撃剣、滑稽演説、独楽回しなどの、色ものも人気があった。加藤貴編『江戸辞典』(東京堂出版)、田中優子編『落語がつくる〈江戸東京〉』(岩波書店)に詳述。

(注 2) 漫才は新年を祝う伝統的民族芸能。三河地方の三河漫才は徳川家の保護を受け、全国に普及した。それに対して漫談の歴史は 100 年弱と浅い。徳川無声は漫談に必要な要素として、①古典がないので自分で創作する、②一貫した筋は不要、③オチは不要、④時代感覚と批評精神が必要、の 4 点を挙げた。漫才ではツッコミが、概念、秩序、安定、常識などプラスの半極を担い、ボケは既成概念を引っ繰り返し、秩序には混沌、安定には混乱、常識には滑稽を説き、マイナスの半極を担う。徳川無声『話術』(白揚社)、井上宏『笑い学のすすめ』(世界思想社)に詳述。

(注 3) 落語に、桂文楽、三遊亭圓生、春風亭柳橋、林家正蔵(のちの彦六)、古今亭今輔、昔々亭桃太郎、雷門助六、柳家小さん、金原亭馬生、三遊亭小金馬(のちの金馬)、桂米丸、桂小南、三遊亭圓右、桂伸治、春風亭柳昇、三笑亭夢楽、三笑亭笑三、柳家小せん、春風亭柳朝、三遊亭円楽、立川談志、古今亭志ん朝、月の家圓鏡、桂歌丸、林家こん平。漫才に、リーガル天才・秀才、晴乃ピーチク・パーチク、青空千夜・一夜、内海桂子・好江、晴乃チック・タック、W しんご、東京二・京太。漫談や物まねに、玉川スミ、宮尾たか志、小野栄一、東京ぼん太、南洲太郎、堺すすむ、佐々木つとむ。ボーイズに、小島宏之とダイナブラザーズ、ミュージカルぼういず、ドンキー・カルテット、さえずり姉妹。講談、奇術、曲芸、軽演劇も人気があった。

(注 4) 桂米朝、笑福亭松鶴、笑福亭仁鶴、中田ダイマル・ラケット、ミヤコ蝶々・南都雄二、夢路いとし・喜味こいし、京唄子・鳳啓助、かしまし娘、漫画トリオ、若井はんじ・けんじ、海原お浜・小浜……。遠藤佳三『お笑い作家の東京漫才うらばな史』(青蛙房)に詳述。

(注 5) 日本にドブプリ浸かった生活、小さな空間に閉じ籠るのは避けたかった。生意気、或いは我儘と言うより他はない。海外一辺倒は駄目、日本ばかりも駄目で、異質な双方の地を両脚で踏み締めておきたかった。しかし、まだ 24～5 歳の、社会の仕組みに疎く、未熟な若造は、自身の小さな力量も分かっていた。果たして何ができるのか。どう生き延びて行けば良いのか・・・。

(注 6) 桂小南(1920～1996)は京都市右京区出身。小学校卒業後、印刷屋に奉公。1934年に京都市内の呉服問屋に行くも、直ぐ東京・日本橋店に移る。日本橋倶楽部名人会で志ん生を聞き、それが縁で 1939 年に三代目金馬の内弟子に。金馬の口利きで二代目桂小文治の身内に。1958 年に八代目桂文楽の好意で二代目桂小南を襲名、真打昇進。終生「稽古の鬼」と称された。著書に『落語案内』(立風書房)。「小南半世紀」東大落語会編『桂小南集』(青蛙房編)pp376～391 に執筆。文化庁芸術祭大賞、文化庁芸術祭奨励賞、芸術選奨文部大臣賞を受賞。1990 年に紫綬褒章受章。

(注 7) 南治、小南治(三代目小南)、南八、南光、南きん、南なん、三代目三遊亭金太郎・・・。

(注 8) パリ郊外のリュエィユ・マルメゾンにあるフランス企業を 2 年前に買収、現地法人を設立しており、近い将来の現地駐在を目的に雇用された。30 歳になったばかりの私に、世界貿易センタービル内のレストランで創業者社長の田嶋一雄(1899～1985)は、「商品売り上げを凶ろうと考える必要はない。先ずは皆に可愛がられる人になって欲しい」と話した。途中入社が珍しい時代で、他フロアから女子社員が「30 歳の新入社員って、どこにいるの？」と来られるのには参りました。佐々木晃彦『豊かさの社会学—変革の時代の生きがい求めて—』(丸善)PP. 51～57 に詳述。サハラ砂漠駐在については、(財)昭和経済研究所アラブ調査室活動実績、2024 年 6 月に掲載。

(注 9) 木瀬部屋付きの親方になっていた元小結・青葉山の浅香山親方(1950～1997)と親しくしていた。弟子の勧誘で一緒に田舎廻りをした。新弟子の入門は脚光を浴びるが、その裏で厳しい環境に耐えきれず部屋から逃げ出すお相撲さんもいる。彼らを連れ戻すのを委ねられることが度々あった。東京場所が近づくと、私は本郷の木瀬部屋に稽古を見に出掛け、部屋のお相撲さんたちは我が家に来た。お相撲さんたちは、ちゃんこ用食材を買いに行き、鍋をつくり、食事後は子供たちと、ファミコン・ゲームやドンジャラをして遊んでいた。お相撲さんにとっては辛い部屋の生活を忘れる貴重な時間。彼らの強い要望で、家では親方の名前を口にするのを厳禁とした。

(注 10) ローカル岡(1943～2006)は茨城県那珂市出身。職業訓練校を経て溶接工をしていたが、芸人の夢が捨てられず上京。1963 年に新山悦郎に入門、売れない頃は地方のキャバレー周りや、ストリップ劇場の幕間のコントに出演した。1965 年に漫才新山

セイノー・サイノーのセイノーで木馬館デビュー。1978年シャンバラローに加入、二代目岡三郎を襲名。1983年に結成した漫才ザ・ローカルの相方が病で倒れ独立。1985年にローカル岡と改名。1999年に大学教授の佐々木晃彦(芸名=ローカル晃彦)とコンビを組み、寄席で「漫才文化経済学」を披露した。著書に『笑いのツボ押します』(扶桑社)。以上『芸能人物事典 明治～平成』(日外アソシエーツ)。(注36)を参照。

(注11)セゾングループの本部機能が集約されていた。応接室で会長の堤清二(1927～2013)から、「2年は待てないが1年は仕事をせず、グループ各社の人と顔見知りになって欲しい。若し入社の特諾が得られるなら、高橋昌也は私が直接紹介したい」と言われた。1987年から高橋は、銀座セゾン劇場の芸術総監督を務めていた。堤は私の芝居好きを知っていた。「決まり切ったデイリーワークはしたくない」旨伝えると、それは堤も望んでおらず安堵した。ほぼ1年の準備期間を経て、特命担当としてソ連各地への長期出張を繰り返した。佐々木、前掲書、PP.58～62に詳述。

(注12)フランスでは同国ボクシング・コミッションの配慮で欧州でのタイトルマッチなどを観戦、国内では日本ボクシング・コミッション発行の通行証で年約500試合観戦、専門誌に入稿していた。時々後樂園ホールで、柳家小せんと一緒にになった。45歳になり、「マッチメイクを最期の仕事にしたい」と業界有力者に相談すると返事は、「それは何時でもできる。九州で大学運営に力を貸して欲しい」。教学ではなく、経営サイドからの雇用であった。経営構想委員会に机を持つ傍ら、大学からは折角の機会と研究室を与えられ、「貿易実務」「フランス語」担当教員の辞令を受けた。しかし、「貿易実務」は2年で他の先生にお願いし、「フランス語」教育は当初から外して戴いた。そして4年後、経済学部の専門科目に「文化経済学」を設けることができた。学校法人の経営と教育、その双方に同時に関わる機会を得たのは幸運であった。(注15、注17)参照。

(注13)1992年3月に各大学の研究仲間、産業、マスコミ、芸能実演の各界、そして行政機関と文化経済学会(日本)を設立。当時の私は日本の大学に「文化経済学」の科目設置をすることを喫緊の課題としていた。“文化が経済に与える影響、経済が文化に与える影響、その相互関係”を学生と学ぶ目的で準備済であった。佐々木「21世紀の共生時代に向けて—フィランソロピー理念の確立—」うら梅の郷会編『日本の自画像 Vol.2』(財団法人日本社会教育連合会)1993年3月。

(注14)本務校、久留米大学、九州産業大学、4年ほど講座を持った九州女子大学の学生との交流は楽しかった。「競育」や「狂育」ではなく、共に学ぶ「共育」をモットーとした。学生には、「学ぶ」とは、①見て、読んで、聞く「受信」、②考える「充電」、③書き、話す「発信」の3点セットで、バランスの良い学びをして欲しい、と

語り掛けた。佐々木「3安人間と3点セット」文部省認定社会通信教育機関誌『道標』（財）実務教育研究所、1995年5月。（注31）を参照。

（注15）大学の給与は直接、大学の経理から東京拙宅に送金しており、各種謝金が単身生活と性懲りもなく続く放浪癖を支えた。「手帳に何日間か空きがあると、ふらっと外国に出掛ける。大学構内の家で単身赴任生活をしているから身軽。この春は南太平洋の島国バヌアツに行った。小学校を訪ねて飛び入りで算数を教えた。もぎたての果物で歓迎してもらったり……。そんな感じらしい。行った国は、仕事も含めると約60か国。『目は内に、心は外に』がモットー。最近では心も内向きの人が増えた、と感じている。特に若者は、コンビニと携帯電話で大抵の用を済ませる時代である。『どこか変だと思いませんか。技術の罨ではないでしょうか』。人間は本来、一人では生きていけない。はずなのに、どんどん便利になって、人と直に交わらなくても生活に困らない社会になりつつある。海外、それも小さな国によく行くのは『助け合って生きている人たちから教わることが多いから』だという。専門は文化経済学。『日本人は経済的贅沢を求め過ぎた。文化に目を戻さないと』。その持論を東京フィルハーモニー交響楽団の評議員など多彩な肩書で実践中。『引き出しが多いほど人生が楽しい』とも。2年前、経済問題をネタに漫才デビューして話題になったのも、この人だ。ちなみに、学生時代は混声合唱団と田辺ボクシングジムを掛け持ちしている。『要はバランス。人間の右脳と左脳の関係のようにね』。文化と経済もまた然り、と説く」以上、西日本新聞「春秋」（2001年6月18日）。（注12、17）を参照。

（注16）若菜春夫（1935生）は、1955年から1965年まで、演劇、TVドラマ、ラジオで活躍。1962年から1979年までコーラス漫談、スリー・トーンズのリーダーとして人気を博した。1980年から2007年は日本演芸家連合（加盟団体：落語芸術協会、落語協会、講談協会、日本浪曲協会、日本奇術協会、太神楽曲芸協会、漫才協団、東京演芸協会、ボーイズ・バラエティー協会、日本司会芸能協会、上方落語協会、浪曲親友協会、関西演芸協会、関西芸能親和会）事務局長。現在は楽夢会事務局長。芸名のローカル岡、ローカル晃彦、冒頭職名“文化世相作家”の命名者。

（注17）いか八朗（1929～2018）は高知県出身。浅草松竹演芸場でリーダーフランケン卓山を師と仰ぎ、コント東京ギャラントメンのメンバーとして活躍。その後、俳優に転身。映画、TVドラマ、CMに多数出演。その後、漫談家になった。若い俳優の面倒見が良く、周囲からは愛されキャラだった。芸名の、いか八朗はボクシングの元全日本フライ級チャンピオン、たこ八郎（斎藤清作、1940～1985）に依拠すると聞き、いか八朗の活動を個人的に注目していた。（注12、15）を参照。

（注18）私たちはメッセージを選択して受理するが、その選択は文化によって左右され

ている。異文化間コミュニケーションでは、伝達手段ばかりではなく、その解釈の方法まで異なる。人は発せられたメッセージを、無意識のうちに自文化のやり方で無視したり、解釈したり、意味づけを行っている。高座では、かような価値観の違いを乗り越え、ハナシで一体感を生み出す能力が求められる。マイケル・H・プロッサー、岡部朗一訳『異文化とコミュニケーション』（東海大学出版会）、古田暁監修『異文化コミュニケーション』に詳述。

(注 19) 楽譜に速度、強弱、休止などの記号があるように、台本にもスピード感の違い、強調したい箇所、空白の領域などが意図的に置かれる。ハナシにある「間」もそのようなもの。だから、話術は間術、間術は魔術とも言われ、それが芸能・芸術領域で演芸として認められる。「ハナシは人なり、コトバは心の使い」と小南から教わったことを、いま、思い出す。台本が立派でも高座は成立しない。お客さんの様子を伺い、時代感覚を添え、計算され尽くした言葉と芸人の動き、そこから私たちは笑い、楽しみ、快感を得る。演者には大きな技量が求められる。ウィリアム・S・ハウエル/久米昭元共著『感性のコミュニケーションー対人融和のダイナミズムを探るー』（大修館書店）、福田健『コミュニケーションセンス』（文香社）に詳述。(注 35)を参照。

(注 20) 牧伸二(1934～2013)は東京都目黒区出身。師匠は牧野周一。東京演芸協会第6代会長。ローカル岡と台本打ち合わせで会う約束が、「シェンシェ、牧さんが来ているから☛例の所☛に行こう」。お店に着くなり牧伸二は持参のテープを掛け、高座では使えない酷い下ネタの歌詞で唄い出した(この歌詞の迫力、牧さん作詞だ。それに声が良い！歌が上手い！)。「大学の先生・・・」発言は、その時、ローカル岡が私に漫才師デビューを促している旨を牧伸二に耳打ちした折りの返事。「寸鉄人を刺す」と言うが、この箴言が若菜春夫とローカル岡の猛稽古に耐える力となった。

(注 21) ローカル岡は“あらゆるお笑いシーンをデザインする”演芸デザイン室をパークサイドビル5階に設けた。立派なカラー・チラシも作成済だ。お抱え芸人に、世相漫談のローカル岡、手品のマジックジャパン(のちの松旭斎滉洋)、漫才のハニー・ショット、そして文化世相漫談のローカル晃彦ほか、とある。台本、構成、演出、企画、宣伝、製作に、岡田満、若菜春夫、佐々木晃彦、近藤哲司、岡田恵子の名前。岡田満は本人、近藤哲司はマジックジャパン。チラシの文言に“不景気で喘いでおり、演芸界も低迷して淋しい。そこでローカル岡一門とグループを中心に創作集団が誕生しました云々”。本人の預かり知らないうちに撒かれるチラシ。何かと前のめりである。学園上層部の目に触れたら解雇か。そして“念願のマッチメイク”の世界に入るのか。それとも経営サイドは『もっと派手にやっても構いません』と言うのだろうか。(注 12)を参照。

(注 22)7月7日(火)午前、時事通信・高田、毎日・高橋から電話取材、9日(金)11時に西日本新聞・生野研究室来室、12日(月)14時30分に朝日・武山、会田来室、16時30分に読売・松本来室、13日(火)12時にRKB毎日・貞刈、18時に毎日・池田来室、19日(月)9時30分に読売解説部(東京・大手町)鈴木、16時30分に時事通信・船本来室、21日(水)9時に共同通信・関口来室、16時に日刊現代から電話取材、17時に報知・小関来室、26日(月)18時40分に東京新聞・西岡来室、28日(水)9時30分にKBC九州朝日放送ラジオ出演、12時に東京新聞から電話取材、13時にRKB毎日・滝沢、丸本来室、29日(木)の夕刊フジ・三保谷は東京・池袋で取材。

(注 23)落語噺の構成で大切なのはオチ。「落ち」の定義からすれば極端であっても異様ではないが、戯曲や他の芸能と比較しても特徴的で、クライマックスは崖縁、ラストは懸河の絶壁をなして落下する。芸の巧拙に関わる問題だが、優れた構成を持つ噺が、傑出した演者で口演された時のみ、これを感じる事が出来る。優れた噺家は台本構成を、自分なりにつくりなおす。野村雅昭『落語の言語学』(平凡社)に詳述。

(注 24)ケーシー高峰(1934～2019)は山形県最上町出身。母方は代々医師の家系で、兄弟始め一族の多くが医師、歯科医師。本人も医学部に進学したが教授と相入れず、学業が疎かになり他学部へ転部。1957年の大学卒業後に漫才コンビを組むも解散。1968年に芸名をケーシー高峰とし、映画に出演、性格俳優として開眼する。毒舌とお色気を混ぜた医事漫談は新年のお笑い番組に必須となり、爆笑王の地位を不動に。ダンディズム極まるファッションセンスも広く知られた。

(注 25)灘康二(1929～2013)は東京都出身。1947年に元あきれたぼういずの川田晴久(義雄)の弟子に、そして川田義雄とダイナブラザーズのメンバーになる。川田の死去に伴い、1958年に歌、踊り、漫談、コント、楽器をミックスしたグループ、モダンカンカンを結成、2010年まで活動した。1995年にボーイズ・バラエティー協会々長。芸術祭賞受賞。

(注 26)ビートきよし(1949生)は山形県最上町出身。師匠はコロムビア・ライト。自動車整備工場で働きながら高校を卒業し上京。東京宝映の養成所を経て浅草のストリップ劇場「ロック座」の幕間芸人に。その後「フランス座」に移籍。ビートたけしと組んだツービートで、1970年代終わりから80年代の漫才ブームを牽引した。たけしの毒舌に、“ツッコミ役”きよしの「よしなさい！」は流行語になった。著書に『相手～ビートたけしとの幸福』(東邦出版)。

(注 27)いっこく堂(1963生)は神奈川県寒川町出身。劇団民藝を経て、1992年に腹話術に転向。二体人形の同時操り、口の動きと発声をずらす時間差会話、唇を全く動かさない技術の高さは、独自の境地として高い評価を受ける。腹話術では不可能とされ

た「パ(破裂音)行」を出すことに成功し、そのボイス・イリュウジオンは音声学の常識を覆した。

(注 28)坊屋三郎(1910～2002)は北海道夕張市出身。吉本興業(東京吉本)に入り、弟の芝利英・川田義雄と「あきれたぼういず」を結成。映画黄金時代の1950年代は喜劇映画を中心に多数出演。高座では長寿を逆手に「まだ生きてるよー」と挨拶、ツカミとした。ボーイズ・バラエティー協会の宴会時にローカル岡は、入会したばかりの私に「シェンシェは、ここに座って」と坊屋との同卓を促した。人懐っこい顔をグシャグシャに、高座の『まだ生きてるよー』と同じトーンでお声掛け戴いた。『お元気ですかー?』。

(注 29)東京に於ける寄席の収容人数は末広亭 300 席、鈴本演芸場 200 席、浅草演芸ホール 300 席、池袋演芸場 100 席、お江戸日本橋亭 100 席、お江戸広小路亭 100 席、国立演芸場 300 席の合計 1400 席。大雑把ではあるが、土曜と日曜は 70%、平日を 40% とし、入場料を一律 2500 円と仮定すると、昼夜 2 回公演で市場規模は約 1 億 2500 万円。一人のお客さんが支払う 2500 円だが、先ず、席亭と出演者で均等分けする。1250 円は寄席に渡って劇場維持費に、残り 1250 円が出演者に配分される。下座(笛、鼓、太鼓、三味線などを使い情緒を添える囃子方)や、社団法人になった協会の家賃、事務員など協会運営費が 250 円あり、出演者に渡るのは 1000 円。出演者が 25 名なら、お客さんからの支払いは一人当たり 40 円。売れっ子芸人でも、寄席に出るだけでは生活できない。五代目三遊亭円楽『円楽のよろずガイドンス』(日本テレビ)、佐藤友美『ふらりと寄席に行ってみよう』(辰巳出版)を参照。

(注 30)渡辺明(1931 生)は宮崎出身。九州共立大学学長。研究分野は、土木工学、構造工学、地震工学。日本材料学会評議員、日本コンクリート工学協会理事、呼子・伊唐大橋架橋技術検討委員会委員長。著書に『プレストレストコンクリートの力学』(技報堂出版)、『忙中閑感』(永田文昌堂)。「進歩する科学技術と文明文化考—無騒音・無振動・無飛散の思想—」佐々木編『文明と文化の視角—進化社会の文化経済学—』(東海大学出版会)に分担執筆。嘉村記念賞受賞。

(注 31)学生の編集・執筆で教科書『生活文化大国への序章—物の豊かさから心の豊かさへ—』(みき書房、280 頁)、提言書『ゴミ減量化とリサイクルの方策について—美しい潤いのある生活空間を—』、報告書『韓国の文化と経済』作成、ドキュメンタリー映画『豊かさとは何か』製作(監督、撮影、音楽、字幕、編集)、文化経済学会九州部会「門司大会」の運営、同部会「宮崎県南郷村・椎葉村大会」参加など。佐々木「ゼミで本や映画づくり—興育を实践—」私学懇談会監修『私学時代』(学園書房)2001 年、第 39 卷 1。(注 14)を参照。

(注 32)糖尿病患者に漫才を聴いて貰ったところ、食後の血糖値上昇が抑制される結果が出た(筑波大学)。お笑いのビデオを見て貰ったところ、癌細胞に対するナチュラル・キラー細胞が活性化される結果が出た(大阪大学)。不登校の生徒が「なんばグランド花月」で笑いを取り戻し学校に行きだした、など“笑いと治癒力の関係”が証明されている。井上、前掲書に詳述。

(注 33)日本笑い学会(設立：1994年、会員：700名)の研究領域は、①笑い学総論、②笑い与健康法、③笑いと地域、④笑いと芸能、の4分野。笑いとユーモアの総合的研究と、笑いの文化の発展に寄与することを目的とする市民参加型学会。当該学会HPに詳述。

(注 34)笑いは人間活動の多方面に関わるから、哲学者は哲学的観点、社会学者は社会的観点から論じ、医学者は医学的方法で笑いの効能を示すなど、個々の研究者が笑いに迫り、「優越の理論」「心的エネルギーの放出理論」「愉快的心理的転位理論」「ズレの理論」で説明しようとする理論が提供されてきた。中村伸『寄席の底力』(三賢社)、井上、前掲書に詳述。

(注 35)遠藤佳三(1936～2021)は東京都墨田区生まれ、のちに足立区に引っ越す。1966年に博報堂を退職。1967年にお笑い台本の世界に入り、大御所の小島貞二に師事。ギャグ工房の新人作家として「笑点」の構成に初期段階から加わり、最後はチーフを務めた。ところで初代司会者の立川談志が「笑点には台本がある」、ビートたけしも「台本」や「作家」の存在を指摘した。大喜利に出ていた小南は生前、「全員がスラスラ演(や)ってはツマラない。そこでズッコケ役の大喜利役者をつくった。柳枝師匠は大役者だった」と語り、笑点のメンバーは良い役者であるべきことを示唆していた。裏付けるように遠藤は私に、「私たちがお題を決め、回答をつくり、最後に各メンバーのパーソナリティに合わせて振り分ける。これが収録直前に行われるので、台本覚えの苦手なメンバーには厄介なのです。司会者がお題をつくり、メンバー自身はその場で考えて回答するなど、できる筈がない」と力説した。「笑点」は演芸番組で、クイズ番組ではない。視聴者が「笑点」で楽しむべきは、“司会者と回答者の話芸”であることは談志も指摘している。著書に『宴会幹事プロからのアドバイス』(ぎょうせい)、『落語家面白名鑑』(かんき出版)。(注 19)を参照。

(注 36)「故郷にローカル線が走っていたので、本名の岡田と合わせて芸名は『ローカル岡』。新聞を毎日数紙読み、政治、経済、社会と風刺の利いたネタのヒントにした。『うちの女房、ヨン様に夢中なんだ。俺を何様と思っているんだ、と言ったら、ヨソ様だって』。寄席で一番面白いのは、世相漫談のローカル岡、と言われるようになった。2003年秋、体調の不調を訴え、肝硬変と分かった。酒が原因だった。還暦を

過ぎての遅咲きだった」。以上、小泉真一「惜別一ギャグの中に温かみ一」（朝日新聞、2006年2月6日）。『子供は通知表貰っても親に見せることないんだって。個人情報保護法ってのが出来たからね』『家で寝ているのにバルサンを炊かれた』など、ファンの間では有名な妻の恵子さんが、売れるまでの長期間を助産婦として支えた。旧知の仲で、ローカルさんから誘われ“漫才コンビ”を組み、舞台に立った大学教授の佐々木晃彦さんは『誰にも病気を気付かせなかった。厳しい世界で弱みを見せたくないのしょう』と推し量る」。以上、松本英一郎「世相ネタ 遅咲きの花」（読売新聞、2006年3月7日）。（注10）を参照。

（注37）五代目春風亭柳昇（1920～2003）は東京都武蔵野市出身。1946年に六代目春風亭柳橋に入門、落語界入りした。女子大生を中心に「柳昇ギャルズ」が結成され、書記長は木村万里が務めた。1958年に二代目桂小南、三笑亭夢楽、三遊亭小圓馬らと共に真打昇進。1973年に国立演芸場設立促進委員長となり、1979年に完成させた。芸術祭奨励賞、芸術祭優秀賞を受賞。

プロフィール 佐々木晃彦（ささき・あきひこ）山形県生まれ。九州共立大学名誉教授（文化経済学、芸術経営学、文化産業論、企業文化論）。漫談家ローカル岡の依頼で「お笑い台本」の世界に入る。作品に「漫才文化経済学」「五感を磨く」「文化的贅沢」「美術館に物申す」ほか。ボーイズ・バラエティー協会に“文化世相漫談ローカル晃彦”で所属。1999年にローカル岡と組み、新宿末広亭で漫才師デビュー。上野広小路亭、浅草東洋館、国立演芸場ほかの高座に立つ。